

「六郷満山峰入行」

同行体験バスツアーに参加して

市野瀬 仁

(会員・佐伯市長島町)

三月二十四日から二十六日までの三日間「大分合同新聞」に掲載された「平成の峰入り」と題する記事を見た。これによると、峰入り行は平安期から江戸期の幕末まで続き、明治・大正・昭和にかけて中絶していた。それが昭和三十四年に復活して以来、十二年ぶりの峰入りであることを知った。

昭和三十四年といえば、私が国東高等学校に赴任した年であった。(あゝそうだったのか)と感慨ひとしおであった。四年間の在職であったが、六郷の寺々のいくつかは参り知人もいるし、なつかしい国東の六郷満山の峰入りの実状をこの目で見たく、参加することを決心した。

時は移る

霞みたつ各駅停車の窓越し

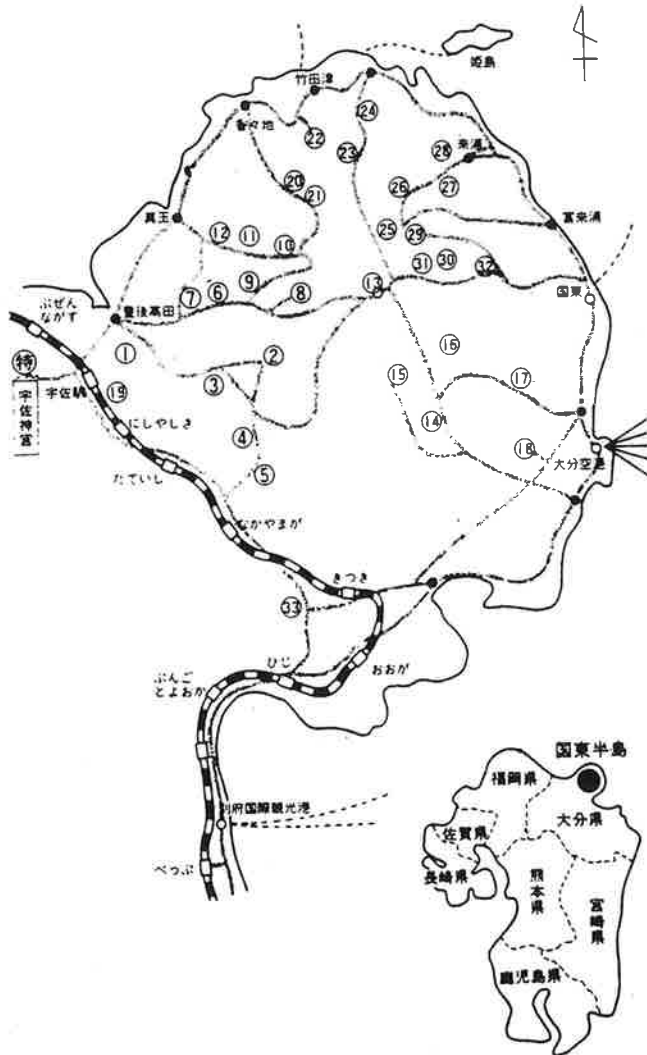
JRと名前のつく前から日豊線に乗ったのは何年ぶりであろうか。沿線の風景がまるで夢のようだ。特に、津

久見・臼杵駅前の変貌に驚いた。大分に近づく工場群が眼前に迫り、都会的な建物が見えてくると大分駅だ。別大国道には車が流れるように走っている。右方に広がる海原は天候のせいか薄暗く見えた。

別府駅に降りるとはじめてテルモピア内に入り、トキハデパートで傘を買い、前の日伯ホテルに泊った。同行・体験バスツアーは大分駅前六時三十分出発のため、明朝六時に起床することをフロントにお願いした。

十時にベットに入ったが、車の音はいつまでたってもやまない。馴れないせいか眠れない。時間が経つにつれて爆音が唸り、高く低く地響きをする喧騒音がホテルの周辺を移動する。たまりかねて四階の窓から見ると、六、七台のバイクに二人が乗り、背に旗まで立ててねり回している。それを応援でもするかのように若い男女が二、三十人はしゃいでいる。これが暴走族というものかと初めて知った。あまりの長い時間なので下に降りて店主に苦言した。

ハイ警察に連絡しております。困ったものです。時折ありますが、正月になりますともっと大掛かりです。どうも相済みません。



特	宇佐神宮
①	報恩寺
②	富貴寺
③	岩脇寺
④	伝乗寺
⑤	胎藏寺
⑥	智恩寺
⑦	妙覚寺
⑧	長安寺
⑨	天念寺
⑩	無動寺
⑪	応曆寺
⑫	弥勒寺
⑬	両子寺
⑭	瑠璃光寺
⑮	護聖寺
⑯	丸小野寺
⑰	報恩寺
⑱	宝命寺
⑲	福昌寺
⑳	靈仙寺
㉑	実相院
㉒	清浄光寺
㉓	千燈寺
㉔	平等寺
㉕	文殊仙寺
㉖	岩戸寺
㉗	長慶寺
㉘	大聖寺
㉙	成仏寺
㉚	神宮寺
㉛	行入寺
㉜	泉福寺
㉝	願成就寺

という。時計は十二時半を示していた。良きも悪しきも、時は移り変わっていく。

峰入同行体験ツアー出発

三月三十日。ホテル前に七時のバスが三台止まった。前のバスが四泊五日コース。後ろの二台が日帰りコースである。白衣・輪袈裟・納経帳を買って十九番の指定席に落ち着いた。白衣にまとい納経帳を戴くと、いよいよという気分になった。バスは一路豊後高田市の熊野磨崖仏へ。

降りしきる雨の石段を、傘をさして押し合いへし合い登りつめると、大勢の人々が護摩の煙りを見上げ、見下ろしている。峰入り僧は青色の合羽に、大掛かりなカメラマンや一般の人のカメラから光が走る。赤い火が雨をはじめ、組んだ大きな木々が徐々に音を立てて燻りから赤く染まり出した。それでも煙りは立ちやまない。峰入りの開白護摩に僧の読経が響く。六郷満山峰入り行は、三月三十日の今日から四月三日の両子寺の結願護摩で終わる。

春雨や護摩の煙りに磨崖仏（ぶつ）かくれ

「護摩」とは何か

炉の中に火を燃やし、供物を焼いて本尊に供養する密教の修法で知慧の火で迷いの薪を焼くことを意味する。インドのバラモン教の火神アグニを供養して魔を除き、福を求めるために行なわれた火祭りを仏教にとり入れたものという（『仏教語大辞典』中村 元）。

バスに帰ると、大分交通観光社のガイドさんから一牧の紙が配布された。それは、次のような「国東六郷満山霊場めぐりの会」会長の言葉であった。

六郷満山、峰入り行結衆にあたって

六郷満山峰入り行の起源は、昔日開祖仁聞菩薩が衆生化益のため、法蓮・華嚴・鉢能・覚満の四聖僧とともに同行なされ、六郷八谷を苦修練行しながら巡礼廻峯したことに始まる。

宇佐市出身の能行上人は、この仁聞菩薩の旧行を興そうとして、天長の初より斎衡にかけて三十一年間、津波戸山（水月寺）の法窟に籠り難行苦行の末、遂に峯道経巡二路を感得した。時に斎衡二年（八五五）二月十五日であった（宇佐宮御託宣集・六郷満山本記）。

また、六郷山東別当に補任されたといわれる能知上人も、能行上人とともに修業されたといわれる。

かくして六郷山の廻峯行は遠く平安期以来の伝燈行法として、興亡断続の変遷を経ながらも衣鉢が紹がれていったものと思われる。鎌倉期以後退潮をみせ始め永い時代衰退のなかにあった六郷山も、江戸期に及んで満山復興の気運醸成とともに峯入行も復興された。

すなわち、寛延二年（一七四九）二月九日に霊場一六六ヶ所の廻峯を初度として（杵築実録・杵築史考）、十年目、二十年目毎に前後七度の峯入行が行なわれた。それも嘉永六年（一八五三）を最後として再び中絶のままであった。（知恩寺柱銘）。

しかし、昭和三十四年春三月満山寺院蹶起の上、実に百六年ぶりに再興をみるにいたり、続いて三十五、六年、五十四年と前後四度にわたって峯入行の宿願が円成された。いづれも江戸期につくられたという『豊列前後六郷山百八十三所霊場記』による仁聞菩薩霊跡を廻峯した。かくして本年は、一期十二年目を迎えるにあたり、六郷廿八山本末僧徒の結衆により、古源に遡り法燈を顕揚、聖跡の巡礼廻峯を決行することになった。

六郷山の峯入行は、満山衆徒として生涯一度は必修の大業と定められていた。入峯行者はひとしく開祖仁聞菩薩の苦修難行の法窟霊跡をくまなく巡拝して、抖擻頭陀（とうそうづだ）の練行を重ね、先徳聖者の行った通りの難行苦行を体得し、一は祖恩に報いては仏法の興隆、天下泰平を願い、一は自行化他の菩薩道を修し、以て法華一乗の解行雙修を実践する行門である。行者則不動明王の心地に徹しては勇猛精神を怠らず、外儀を整え不惜身命の心願を誓う。

峯道の山溪を往還すること一日行程十有余里と算し、この間仏閣、法窟、権現神詞等仁聞聖者ゆかりの古跡を巡礼しては念珠護念、随時に行法を修す。他にみる単なる巡礼巡拝とは本質的に性格を異にし、また各霊山に行なわれる修験道ともかなり内容に相違がある。国東山岳信仰の独自性をみることができ。

一般の峯入行は古儀に倣うとはいえども、日程、順路等に一部変更を余儀なくされ、前行として三月二十九日、大先達の宇佐宮及御許山參詣祈願が行なわれ、四月三日、（旧曆二月十五日釈迦世尊入滅の日）今熊山不動明王御宝前法庭を設定、満山僧徒総出仕のもと採燈護摩供を奉

修して開白の厳儀を行う。ここを兜中揃（トキンゾリ）
発錫の地として出立、四月三日満行結縁に至るまで六日
間、西三郷より東三郷に右逆（そう）する如く順路をと
り、きびしい不退転の行法が厳修される。

伏して翼くば、仏天の照覽と明王の加護を至心に祈念
し、開祖仁聞菩薩並びに先德聖者の冥加を垂れ給わんこ
とを（応曆寺住職 大獄順公記）。

平成三辛未年入峯吉祥日

六郷満山入峯行者中敬白

（註） 抖擻頭陀（とうそうづだ）の練行……僧とし
ての行（註は筆者）。

兜巾（ときん）……山伏のかぶる頭巾

右逆（うそう）……右折

大獄順公法印……私達寿号（四泊五日ツアー

の乗車バス）の特別説明者。

法印……天台宗の僧の位。法印―法眼―法橋。

村人は法印さんとか法印様と呼称している。

峰入り寺のハイライト天念寺（無住）豊後高田市

昨日の雨は覚悟はしていたが、お陰様で今日は傘の必
要はなく寒いくらいである。

正しくは「長岩屋山天念寺」で、長岩屋・天念寺のい
ずれも地名に由因するものとされている。平安時代中期
の建立。本尊は観音菩薩である。天念寺背後に屏風を立
てたようにつらなる奇岩・奇峯の岩場の各所に修験の岩
屋が十カ所もあり、それぞれの龕中には木彫りの立派な
仏像が奉安され、修験者が日夜修業に励んでいた。それ
で古い記録には、天念寺後方絶壁の行場を「龍門窟」と
呼んでいる。これは、中国の大磨崖仏群で名高い龍門の
石窟にちなんだ名である。

現在は「龍門窟」の中に木彫仏は一体もなく、天念寺
本堂に移されている。特に阿弥陀如来立像は美術的に高
く評価され、同像を中心として釈迦・勢至・日光・月光
吉祥の五尊体を加えて、明治三十九年（一九〇六）に国
宝指定を受けた（現在では、阿弥陀如来像は戦時中売却
されたため、他の五尊体は県の重要文化財となっている）。

天念寺の修正鬼会（しゅじょうおにえ）は、大分県指

定無形民俗文化財であり、国の記録選択を受けている。毎年旧正月七日に実施され、国東町岩戸寺の修正鬼会と共に県下によく知られている。

誰もが天念寺で忘れられないものに、天念寺の川中不動明王が大きな石の面に陽刻されている姿がある。一般に「川中不動」と呼ばれている。右側は矜羯羅童子（こんがらどうじ）で、高さ一七三センチメートル、中央は不動明王で、高さ三七〇センチメートル、右側は制吒迦童子（せいたかどうじ）で、高さ一七三センチメートルである。制作年代は寛永四年（一六二七）四月とされている。

参考文献 国東半島の六郷満山 酒井富蔵著

国東六郷満山霊場めぐり 渡辺克己著

続いて無明橋の架かる岬々たる岩場に辿り着くまでの長い時間、人々は白い行者の姿を見つげんと、それこそ畠や道路や橋の上で釘づけに立ちすくんでいる。しんと寒さが身にしむ。やっと見つけ出した一人、二人と岩陰に現われた。右上の頂上から法螺貝の音が響いてきた。一人、二人と這うようにして無明橋を渡り、引き返して右手の小高い場所に集まって般若心経を唱えている

のであろうか。一塊の集団が動こうとしない。一機のヘリコプターが上空を回っていたが、二機となり、修験者の難行地登攀の様子をはじめ見上げる観衆の群れを、あるいは家々や、畑や川や竹林や岩の峯々を撮影をしているのであろう。NHKとOBISの放映があるというので、ハイライト天念寺の上空に飛んできたのだ。ここで一幅の絵巻を次の詩によって桃源の境地に入って行こう。

峯入りの道

土谷秀之

歴史がただよう 天念寺

君と二人で訪れました

こけし岩場の細い道

行者修験の足跡を

一つ二つと 数えつつ

夢を抱きよせ 峯入りの道

六郷満山 天念寺

法螺を鳴らして 回路を駆けて

行者舞ったと 人は云う



熊野磨崖仏の護摩



左 大嶽順公法印（応曆寺住職）
右 今熊豪正法印（千灯寺住職）

九字切つての 天狗とび
白い頭巾も 今昔
菩薩がまします 天念寺
君と二人で 訪れました

名負難所は 無明橋
さがる鎖に この命
ささえあう手に ほのぼのと
愛がゆれます 峯入りの道

大分交通観光公社提供

以上のように、適時適所で参考資料を提供していただいた。

写真説明

上 熊野磨崖仏の護摩

下（左）大嶽順公法印（応曆寺住職）「国東六郷満山霊場めぐりの会」会長（七十六歳）昭和三十四年復活の貢献者・比叡山修業歴三年・『国東文化と石仏』の著書・峯入行四回実施・四泊五日の説明者。

（右）今熊豪正法印（千灯寺住職）・昭和三十四年復活の貢献者（七十七歳）比叡山在学を含む修業歴十年・昭和十二年一〇



天念寺の川中不動



不浄(俗世間)の地を修験者に歩かせないとの習わし



無明橋

○日苦行者(九州で一人)・峯入行四回実施・日帰りコースの説明者。

(上) 天念寺の川中不動

(中) 不浄(俗世間)の地を修験者に歩かせないとの習わし

(下) 右手の一番高い岩山で法螺の音が聞こえる。無明橋を渡り、引き返して右手の安全地に集り読経する。午前九時から十時ごろの風景。